

「日本のテレビ、これで良いか」—— 静岡新聞「論壇」より

1カ月前の5月29日、静岡新聞朝刊の「論壇」に、ニューヨーク大学名誉教授・東京大学客員教授佐藤隆三氏の「日本のテレビ、これで良いか」と題する論評が掲載されました。常々思うところと相容れる内容であったため、わが意を得たり的心境に至りました。次に再現してみます。

娯楽性を競い合う民放

テレビ番組はその国の縮図だという。日本に長く住んでいた米国人夫妻が少数のグループのための天覧歌舞伎に招かれて来日した。1カ月前近くマンションを借りて日本で生活した。夫君（大学教授）は日本の演劇研究者、夫人はハーバード大出身の日本語翻訳家で共に知的親日家である。久しぶりに会った両人が最初に発した言葉は「日本のテレビはひどいね」であった。

これは大方の日本人も常々感じていることだ。この夫妻の発言ではないが、日本の液晶テレビ等のハードは良いが、番組（ソフト）は米国に比べて断然劣っている。

まず、東京の例で見ると、NHK受信料を払って見られるチャンネル数は民間5局、NHK関係5局である。一方ニューヨークでは、一定の受信料を支払うだけで約100チャンネルを見ることができる。数が多いことが必ずしも良いことではないが、日本の民間5局は特長がなく、同じ人がどのチャンネルにも一日中顔を出している。全局が競って追求しているのは「面白けりゃ良い」という娯楽性だけだ。

米国で100チャンネルもあるのは、それぞれが差別化の原則に従って特化した番組を作っているためだ。3大ネットワーク（ABC、CBS及びNBC）でさえもニュース番組以外は独自の企画で競争して視聴率を上げようとしている。原則的に司会者やタレントが局を渡り歩くことはない。

3大ネットワークは今ケーブルTVに視聴者を奪われている。特にニュース部門では、CNN、フォックス、MS・NBCは一日中世界からのニュースを即刻伝えている。3大ネットワークの夕方の30分ニュースは臨場感がないとされている。

CMのない公共テレビは視聴者の寄付で賄われているがNHKのような幅広い番組制作はできない。ドキュメンタリーの規模も小さく、莫大な予算を有しているNHKには太刀打ちできない。

前述の夫妻によると、NHKの衛星・デジタル放送は質が高いが、視聴率を気にする必要のないNHKとして一般の番組も民間局と競って低俗に墮してほしくない、とも言っていた。

民主主義思考培う役割

米国の100に近い番組の中にはもちろん俗悪なポルノ番組もあるが、スポーツ、料理、古い映画、学術的なもの、議会中継、歴史、歌、演劇等、あらゆる分野を網羅している。加えて、宗教や異なった移民グループを対象とした特殊な番組もある。スペイン語、中国語、韓国語は言うに及ばず、TVジャパンと称する番組は一日中日本のNHKニュースや民法番組を取り混ぜて放送している。

米国のテレビはまさに国の営みの縮図である。この観点からすると、日本のテレビの単一性も民族の均質性を表すもので重大視する必要なし、との主張もあろう。だが、テレビメディアの影響は強大だ。学校の教育以上に恒久的に人々の思考体系を変えるし、テレビの知名度如何で政治さえも変わる。

やらせや虚偽の報道は断然許されないが、真実を二つの対立的な観点から議論する習慣は日本に根付いていないようだ。ある問題が起きると、各局がその道の権威の意見だけを横並びで報じる。つまり、民主主義的思考を国民の中に培うことが日本のテレビの究極の役割なのである。

次号では、かつて書いた自論をお示しいたします。

（平成19年7月）

「心までは奪われない価値基準を」 — かつての「賢い親になろう」より

先月号の「日本のテレビ、これで良いか」（静岡新聞の「論壇」より転載）に関連するお話です。平成12年の10月、当時勤務していた城北小学校の学校だよりも先の論壇と同様の思いを綴ったことがあります。自説ながら読み返してみても、私たち大人は子どもたちのためにもっともっと賢くならなければと、改めて思われます。ここに再現してみます。

先月号で、今日の若者や子どもたちに捨て置けない問題点を生じさせた最大の責任者は私たち親であり大人であって、私たち大人のものの見方や考え方、つまり価値観がそのまま子どもに反映されている旨を述べましたが、テレビもまた大きな影響を与えていることを見逃すことはできません。もちろんテレビ番組も大人が制作しているので、これも広い意味では大人の責任ということになります。

ご存じない方もいらっしゃると思いますが、かつて「てんぷくトリオ」というお笑いグループに、三波伸介というタレントがいました。今は他界されていますが、口の周りを黒く塗ってほおかぶりなどしながら登場する様はいかにもこっけいで、その表情、しぐさを見るだけで人々は笑い転げたものでした。そのメンバーには伊東四朗も加わっていて、この方は今でも活躍中です。もっと古くなりますが、「てなもんや三度笠」では、藤田まこと、白木みのるが人気を博していました。芦屋鴈之助、芦屋小鷹、藤山寛美、三木のり平、森繁久弥などといった面々も茶の間に笑いを提供してくれていました。

彼らのつくり出す笑いには共通点があります。彼らは、自らがどじを演じ観客を笑わせたのです。彼らは、劇の中でどじ役に徹し、一生懸命演じました。観客は、それが演技であるため、演技のうまさを感じながらも安心して笑うことができました。そればかりか、笑った後は爽快感さえ感じることができました。彼らはそのために常日頃から研究を重ね、稽古を積み、楽屋裏でも真剣に打ち合わせをしていたのです。

ところが、今日の番組の中では、登場者は、人の笑いを誘うのに相手の短所を指摘したり、相手を卑下したり小馬鹿にしたり、あるいは下品この上ない行為をとったり言葉を吐いたりしています。飛び交う言葉も日本語の美しさなどまるでお構いなし、語法上も間違いだらけです。そして、挙句の果ては「死ぬ」「殺すぞ」などの言葉も飛び出す始末です。低俗極まりない有様です。観衆・聴衆はさぞかし目をそむけていることだろうと画面を見やれば、驚くことに会場に詰め掛けた観聴衆まで大騒ぎしているではありませんか。番組を制作する人、出演する人、そして、それを見る人、中には少年少女たちも交じっていますが、ほとんどが若い大人たちです。彼らの価値観がここまで低下したかと思うと、空恐ろしさを感じます。いや、空恐ろしさなど通り越して虚しささえ感じます。このような出演者は、出演しているときだけでなく、おそらく私生活の中でもそのままの感覚で過ごしているのでしょうか。真面目さ、正直さ、真剣さなどが馬鹿にされる今日の風潮は、こんなところからも生まれてきているのでしょうか。人をこけにして笑いを誘い、自らもそれで楽しむといったこのようなテレビ番組は、いじめを助長させる上でも大きな影響を与えているはずですよ。

今、テレビ番組は視聴率アップに躍起になっています。したがって、テレビ番組の低俗化は、さらにエスカレートしていくでしょう。テレビ画面に目を奪われても、心までは奪われない価値基準を、まずは私たち親が態度で示していこうではありませんか。

運動会は心を育てる格好の機会

「えっ。心を。それって、体の間違いじゃないの。」

こんな声が聞こえてきそうな今回の題名です。いえ、間違いではないのです。3歳、4歳、5歳の園児にとって運動会は、紛れもなく心を育てるチャンスなのです。

運動会といえば、玉入れあり、綱引きあり、リレーありで、それこそ日本中どこへ行っても、赤勝て、白勝て、プレー、プレー、プレーとみんなで競い合います。精華幼稚園も例に漏れません。園全体が、青組、白組に分かれて競います。玉入れも、綱引きも、リレーも行います。

子どもたちは、今のうちから大盛り上がりです。練習であっても、行うたびに「えい、えい、おう。がんばるぞう。」と氣勢を上げます。そして、競っている最中(きなか)は、まさに真剣そのものです。いつも力を出し切ります。順番を待っている子も、「〇〇ちゃん、がんばれえ。〇〇ちゃん、がんばれえ。わあ。わあ。」と大賑わいです。

白組さんと緑組さんのお部屋の前の廊下は、見る見るうちに子どもたちで埋まります。お庭の盛り上がり気味に気付いた先生たちが、子どもたちを引き連れて応援に駆けつけるからです。年中さんの前の廊下は、打って付けの観覧席です。観覧席からも声が上がります。「青組がんばれ。青組がんばれ。」「白組がんばれ。白組がんばれ。」

そうこうしているうちに、競技は終わります。すると、そこでまた大歓声。「結果を発表します。青の勝ち。」「わあい。」同時に、観覧席からも「わあい。」

お庭では、勝った子どもたちが小躍りして喜んでいきます。その横では、負けた子どもたちが口をつぐんで、小躍りしている子どもたちを見つめています。中には、目をこすっている子も見受けられます。悔しさ、悲しさに耐えようとしているのは、一目瞭然です。実は、これがねらいです。どちらの姿も私たちが願う子どもの姿なのです。

私たちは、子どもたちに、人間性豊かな人に育ててほしいと願っています。人間らしさと心の豊かさを具(そな)えた人になってほしいと願っています。この心の豊かさを具えた人とは、人はもちろんのこと、周囲をゆったりと受けとめ、じっくりと受け入れることのできる広くて深い心を持ち合わせている人のことを指します。そして、そのような心具えるには、人の心の動きが、あるいは感情が、実感として分かることが大切です。人の感情が実感として分かるためには、まずは、自分自身が人としての感情を当たり前のように抱き、またその感情を当たり前のように表せる人間であることが欠かせません。嬉しいときは嬉しいと、悔しいときは悔しいと、悲しいときは悲しいと、楽しいときは楽しいと素直に感じる、いわゆる喜怒哀楽の感情です。この喜怒哀楽の感情を、豊かに抱き豊かに表出できることが必要です。

運動会の競技は、全てが思いどおりにいくとは限りません。勝つときもあれば負けるときもあります。だけど、子どもたちは、全て勝とうと一生懸命です。努力もするし工夫もします。だから、結果を得たとき、喜びも大きければ悔しさも大きいのです。子どもたちは、このことによって自ら感情の泉をかき回します。その結果、心が鋭敏になり、感性が高まります。まだ3・4・5歳の幼児ですので、他人の心の動きにまで思いを馳せることはできませんが、やがて成長して、他人の喜びや悲しみ、悔しさや憤りにまで思いをめぐらせることができるようになるための素地は十分耕されます。

精華幼稚園は、常に学びと育ちの連続性を追い求めています。小学校、中学校、高等学校等と先を見通しながら、つまり子どもたちの人としての成長を見据えながら、その成長の度台づくり、裾野づくりに精を出しています。そのために、今は、毎日が運動会です。10月7日に向けての毎日が、子どもの心の育成時なのです。

(平成19年10月)

早期英語教育の落とし穴

10月26日に報じられた英会話学校最大手NOVAの会社更生法適用申請の報は、倒産問題とは別に、今再燃している小学校への英語教育導入論議に少なからず世の関心を引き寄せたのではないのでしょうか。というのも、NOVAは英会話学校。小学校への導入が検討されているのも、主として会話力、コミュニケーション力の幅を広げようとするものだからです。

平成18年3月27日、中央教育審議会教育課程部会の外国語専門部会は、小学校5年生から週1回程度の英語教育を必修化すべきとの報告書をまとめました。すると、それまでくすぶっていた小学校への英語教育導入論議が一気に表面化しました。途中、伊吹文部科学大臣の「必修化必要なし発言」があり、論議は一時トーンダウンしましたが、今年の6月1日に政府の教育再生会議が中・高等学校の英語の授業時数、単語数の増加、小学校での英語教育の導入、外国人講師の活用の拡大を提言し、さらに、9月10日、文部科学省が中央教育審議会教育課程部会に対して、早ければ平成11年春から英語活動を導入するという案を提示すると、小学校への導入の気運は再び高まりを見せ始めました。もちろん、導入反対論も、未だ根強く残っています。反対するにはそれなりのわけがあるからです。

私自身は、根っからの賛成論者でも根っからの反対論者でもありません。コミュニケーション力の幅が広がることは大いに喜ばしいことですが、喜んでばかりいると大きな落とし穴に落ちかねないと思うからです。いわば、早期英語教育の落とし穴です。そこで、今回は、こうした英語教育論議を背に、幼児期における英語教育について私なりの考えを述べてみたいと思います。

私たちは、現在、日本という国の中に住んでいます。日本の中では、日本語が共通言語として用いられています。ですから、私たちは、毎日日本語を通して生活しています。話したり聞いたりするにも日本語を用います。読んだり書いたりするのも日本語です。そればかりではありません。今晚のおかず、何にしようかなあとか、今日は雨が降りそうだから傘を持って行った方がいいかなとか、悔しいなあ、今度こそがんばるぞなどと思ったり考えたりするのも、全部日本語を媒体としています。このことを換言すれば、私たちは日々日本語を用いて思考し、日本語を用いて理解しているのです。つまり、私たちは日本語圏に住み、日本語を思考言語として生活しているのです。

このことをアメリカやイギリスやニュージーランドなどに当てはめてみましょう。アメリカやイギリスやニュージーランドは英語圏です。ですから、これらの国の人たちの思考言語は、一般的には英語です。これらの国の人たちは、英語で見て聞いて、書いて話して、考えて認識しているのです。

ここまで申し上げれば、私が何を言いたいのかお分かりいただけるのではないのでしょうか。子どもたちは、今日本に住んでいます。そして、今日も明日もあさっても日本語を思考言語として生活していきます。つまり、子どもたちは、日本語で思考し、日本語で理解し、日本語でその思考力や理解力を鍛えていくのです。

先述したように、私は、異文化に触れ、コミュニケーション力の幅が広がることは、子どもたちの人としての成長にとって益大なりと考えます。その意味で、子どもたちに英語教育、もっというなら英会話教育が施されることは歓迎です。しかし、その一方で、日本語を軽んじると思考力鈍化という落とし穴に落ち込んでしまうという懸念は抱き続けています。

私は、教育委員会時代にたくさんの帰国子女と接してきました。彼らは日本語を話せますが、それでも日本語の再教育は急務でした。このことをもとに、私は、英語に触れる機会が増せば増すほど、正しい日本語に触れる機会も増やしていくことが必要と考えるのです。現に、静岡市も浜松市も、帰国子女の日本語教育には力点を置いています。

(平成19年11月)

子どもの心を耕そう—その1 空気のような子どもたち

先日、一人の若者が私を訪ねてやってきました。彼は、かつての教え子で、今は小学校の教師をしています。若者といってもすでに教職8年目を数えていて、勤務校も3校目に入っています。今年は6年生担任だそうです。その若者が言いました。

「先生、このごろ子どもが変わってきたように感じます。跳ね返りが弱いんです。まるで空気のように、押しても手応えが感じられない子がいるんです。ぼくらが子どもの頃にはもっと先生に反発したり、もっとクラスで盛り上がりたりしたように思うんですが。運動会が近づくと、放課後みんなでクラス対抗リレーの練習をしたり、土曜日の午後なんか、先生の呼びかけでみんなでキックベースボール大会を開いたり。もちろん弁当持ちでしたが。」

跳ね返りが弱い。押しても手応えが感じられない。彼は、そう感じられるという例をいくつか挙げてくれました。

- ドッジボール —— 真剣に逃げようとしな。当たったとき、表情に特別な変化が見られない。外野に出ても、率先してボールを取りに行こうとしな。したがって、ボールの返りが遅く、ゲームがだれてしまう。
- 10分間持久走 —— シャベリながら走る。叱咤(した)しても、特に変化なし。真剣な相手に対して真剣に取り合おうとしな。したがって、真剣なこちらは侮辱されたように感じる。
- 校内音楽会に向けての学年合唱練習 —— 学年全体の士気を高めようと、子どもたちを立てて練習努力を褒め、ねぎらい、さらに次の高みに向けての手近な目標点を端的に示してあげても、意気を感じず。士気は一向に上がらな。
- 社会科の調べ学習 —— 何についてのどのように知りたいという主体的な意識が希薄なため、図書室へは出向くものの、何となく本を手に取り、また戻して、時間を費やしてしまう。
- 学年集会 —— 教師は子どもたちの目に訴えるように語りかけるのだが、うなずきもせずつぶやきもせず。目が合うと、自分の目をずっとそらす。一対一で話しかけたときは、視線が前を向かず、自分の前に落とす。やはり、目を合わそうとしな。学年集会に限らず、ちょっと尋ねたりちょっと伝えようとして話しかけたりしたときも同様の態度、行動をとる。

彼らは、算数など、できなと次に進めな学習の場合は、まあ一応はやるそうです。それは、次へ進めなと自分が困るからだそうです。しかし、作文や調べ学習やみんなで歌を歌うなど、直に自分に、しかもすぐに跳ね返ってくるものではない場合、つまり、できなことがはっきりして自分一人が×になってしまうというようなものではないものとき、彼らは乗ってこなのだそうです。

彼らは悔しくてたまらなだろうと思われるような場面でも、悔しさらしきものが表情に表れてこなそうです。何かしらっと冷めたようなそんな空気を持っている彼ら。しかし、彼らは、決して意図してそのような態度、行動をとっているわけではないそうです。ですから、服装や言葉遣いも全く他の子と変わりありません。もちろん、反社会的な行動もありません。それより何より、彼ら自身、自分たちの態度、行動に何ら不自然さを感じていなのだそうです。

(次号に続く)

(平成19年12月)